

昭和の南海地震体験談

氏名: 榊原 タカ子(さかきばら たかこ)
生年月日: 昭和12年5月6日
地震を体験した場所: 新宮市・自宅2階寝室
当時の家族状況: 父、母、妹(0歳)



1) 地震発生時の状況

自宅2階の寝室で就寝中、「ドーン」という音と共に激しく縦に揺れた。まだ外は暗く、夜明け前だった。飛び起きたが、1階に居た父から「布団を被って、そこにおれ！」と声を掛けられたので、言う通りにし、揺れが収まるのを待った。待つ間、部屋の電灯が左右に大きく揺れていたのを覚えている。横揺れに変わっていた。揺れが収まっても、父は「まだじっとしていなさい」と言ったので、そのまま待機した。

2) 津波襲来時の状況

津波の発想は無かった。自宅付近で津波の被害は無かったと思う。どこの地域が被災したのかも知らなかった。

3) 家族の行動・被害

家族の無事と安全を確認した後、父は地域の状況を見に出かけた。余震が続いていたので、母と妹と3人で家の前に出ると、近所の人達も出てきていて、「竹藪に入った方が良いのでは？」等と話をしていた。最初の大きな揺れで屋根瓦が数枚落下していた。この時点で被害はこれだけだった。夜が明け、明るくなってくると、ある地区から火事が起こった。地震の揺れで断水となっており、水を使った消火活動ができなくなり、消防(団?)の人が訪ねて来て、「この地区は火事になります。あなたの家は風向き等の変化が無ければ、午後1時に燃えるので、家財道具を持ち出しておいて下さい」と母親に言っているのを聞いた。布団と簡単な身の回り品を裏の広場に出し、待機していたら、言われた時間通りに火が移り、目の前で自宅が燃えていった。その後、浮島地区に住んでいる母の友人宅に行った事は覚えているが、どう行動したか、どう思ったか等は覚えていない。父がそこに訪ねて来て再開できたのは夕方だった。

4) 集落・周囲の被害

近所は火事の延焼で全部燃えてしまった。どれだけの被害状況だったのか判らなかったが、3学期が始まり学校に行くと、先生が亡くなった方や被害の様子を話して下さり、大変な出来事だったと初めて認識した。子供だった為、大きな出来事だと思っていなかった。

地5) 震・津波後の生活

火事の後、避難した浮島地区の母の友人宅にそのままお世話になった。学校は3学期からいつも通りに始まり、友人達と再会した。大体は揃っていたように思う。子供だったからか、地震前後で生活が変化したという事は無い。不自由さや困り事は感じなかった。水や食料に対しても同様に不自由さや不便さを感じる事は全然無かった。1ヶ月経った頃に両親がトリデ町に自宅を建て、引っ越した。地震前の生活と同じように落ち着くまで約1年程度かかった。



6) 次の災害への備え

浴槽に水を張っている。水があれば火事にもならなかったし、体の維持にも必要不可欠なものなので、水は大事に思う。物の準備より、普段の心構えや生活を大切に思うので、特に何もしていない。災害以来、眠る時も出かけられる服装でないと怖いという知人がいたが、備えの為に生活の制限があるのは違う事のように思う。どんな形の災害に遭うのか分からないし、備える事は良い事だと思うが、それよりも何が起こっても落ち着いて行動できるような心構えや日々の生活が大事だと思っている。